スクールカウンセラーだより　No.4

令和３年７月

SHONAN GAKUIN HIGH SCHOOL

スクールカウンセラー　中野隆治

「子規の思いやり」

みなさん、コロナ禍の今、ソーシャル・ディスタンスはどのようにして取っていますか。街を歩いていると、人々の間の距離はほどよく離れ、マスク姿の間隔は保たれているように見えます。肩を並べて歩くカップルの後姿も、幾分の隙間ができているようです。

「柿食へば　鐘が鳴るなり　法隆寺（柿を食べているちょうどその時、法隆寺の鐘が、まるで秋を告げるかのように鳴った。）」の句を残した明治の俳人・歌人正岡子規（まさおかしき）は、晩年（と言っても、34歳で亡くなっているのですが）、重度の結核を患（わずら）っていました。もちろん、感染症の一つで、今は完治しますが、当時は不治の病と言われていました。当然、子規の周囲から友人達は近づかなくなりました。人好きの子規はたまらず、毎月、句会（俳人達が自作の俳句を持ち寄って、それぞれ評価し合う会）にことよせて、多数の門人達を呼びつけ、悦に入（えつい）っていました。ただ、その時の様子が絵に残されているのですが、冬の寒い日にもかかわらず、障子は開け放し、部屋の一番外の縁側近くに子規が座り、門人達は、かなり離れた所で対座していたのです。子規の思いやり、心の優しさが伝わってくる場面です。

ひるがえって現在ではどうでしょうか。

コロナが感染することのできないのはただ一つ、人の心だと思います。逆に、人の心は、誰かの心に感染して行くことは可能なのです。晩年の正岡子規の句会の場面のような、心の温かさで、コロナに向かって行くことはできないでしょうか。誰かが、ほんのちょっとした思いやりを誰かに見せれば、その温かさが、誰かに感染して行くのではないでしょうか。

今こそ、温かく、思いやりにみちた人の心が問われる時代なのかもしれません。それは、学校にも、クラスにも、部活にも、家庭にも、およそ、みなさんが行動する周囲に感染して行けばいいと思います。

やがて来る夏休み、目まぐるしかった一学期も終わり、様々なことに思いを巡らす時間が生まれるのではないでしょうか。思いやりと、優しさ・・・・・・この二つのテーマで、夏休みを過ごすのもいいかもしれません。みなさんの心の成長を祈っています。

終わりに、子規の人柄がしのばれる一句をあげておきます。

紫陽花（あじさい）や　昨日の誠　今日の嘘　　子規

（紫陽花が咲いている。昨日は本当だと思っていたことが、今日は嘘に変わってしまうような、移ろいやすい世の中や人の心と同じように、日々、色を変えながら。）